

巻 頭 言

技術立社

Establishment of Company on Basis of Technology



専務取締役

妹尾 泰輔

T. SENOO

学生時代，社会人を通じ技術の領域には直接関わる事が極めて少なかった私にとって，当社エンジニアリングジャーナル巻頭言の打診を受けたときは正直のところ戸惑いを感じたものであるが，反面，“技術一筋”の人たちに全く別の角度からの見方があることも伝えてみたいと思っていたこともあり，引き受けさせていただいた。

近年，中国・インドをはじめ，東欧，中南米諸国の急激な経済発展に伴い，日本が得意としてきた「モノづくり」が脅かされているという製造業空洞化懸念をよく耳にする。一方，これを打破するのもやはり「技術」であり，「技術立国」論も盛んである。製造業，所謂「モノづくり」の当社はどうか？永年財務を中心とした管理業務に携わって来た私の立場から，次の世代を担う「若い技術者」への期待を込めて，以下に最近感じたことも含め，お願いをしたい。

ある大学の教授ご自身から「私は40歳くらいまでは論文執筆に集中し，数多くまとめたと自負していたが，あるとき，それらは世の中に役立つとは言いがたい机上の空論であることに気がついた。それからは社会への貢献を念頭に置いた研究活動に切り替えた……」との話を伺った。この言葉にはいろいろ考えさせられることが多かった。若いときは往々にして勝手な思い込みで突っ走ってしまうことがある。“批判を恐れず”という表現もあるが往々にして排他的で一人よがりの自己満足ということが多い。

先生の言をお借りした「モノづくり」への取り組みには「世の中の役に立つものか？」言い換えれば「独創性，先見性によりお客様の満足を得ているものなのか？」ということかと思う。もちろんいろいろな取り組み方があるが，私の理解は次のようなものである。

1. 謙虚な姿勢での関連知識の吸収と理解，さらなる研鑽による高度な凌駕技術への昇華
2. 独善性を排して世の中の動向を把握し，これらを取引し商品化する感性の強化・保有と効率的な工夫
3. 厳格な行動規範と不屈の精神

古来「魂が込められたモノ」は歴史に名を残すことが多いことを思い出してほしい。

前述の取り組みは「魂を持った製品とするためのモノづくりの考え」であり，これこそが空洞化懸念を払拭させ，技術立社を可能ならしめるものではなからうか。若い技術者諸君のみならず製造業を営む社員全員にも期待したい心構えである。